

2013年1月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

北極海にはブロッキング高気圧が形成され、極うずは分裂した。500 hPa 高度は中国付近で正偏差、日本の東海上では負偏差となった。これに関連して、シベリア高気圧は南東への張り出しが強く、また、アリューシャン低気圧は日本の東海上で発達し、北東アジアでは冬のモンスーンが強まった。太平洋から大西洋にかけては波列パターンとなり、偏西風が南北に蛇行した。アジアジェット気流は平年より強かった。

熱帯の対流活動は、インドネシア多島海付近から太平洋西部と南太平洋中部で平年より活発、インド洋中・東部とオーストラリア北部で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、インドネシア多島海付近から太平洋を東進した。対流圏下層の赤道域は、インド洋東部から太平洋西部で西風偏差が明瞭だった。対流圏上層では太平洋東部で低気圧性循環偏差が明瞭だった。南方振動指数は+0.1だった。

世界の天候

2013年1月の世界の月平均気温偏差は+0.11°C（速報値）であった。1月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.72°C/100年（速報値）である。主な異常天候発生地域は次のとおり。

○メキシコ南部からコロンビア北部で異常高温となった。

○チリ及びその周辺では異常高温となった。

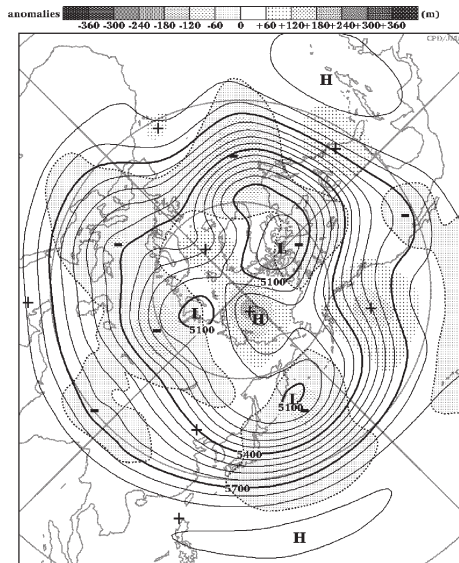
○オーストラリアでは広い範囲で異常高温となった。

1月のオーストラリアの平均気温は、統計を開始した1910年以降で最も高かった（オーストラリア気象局）。

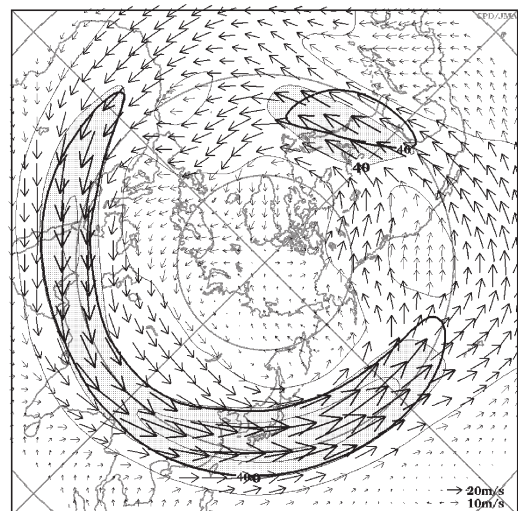
（気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

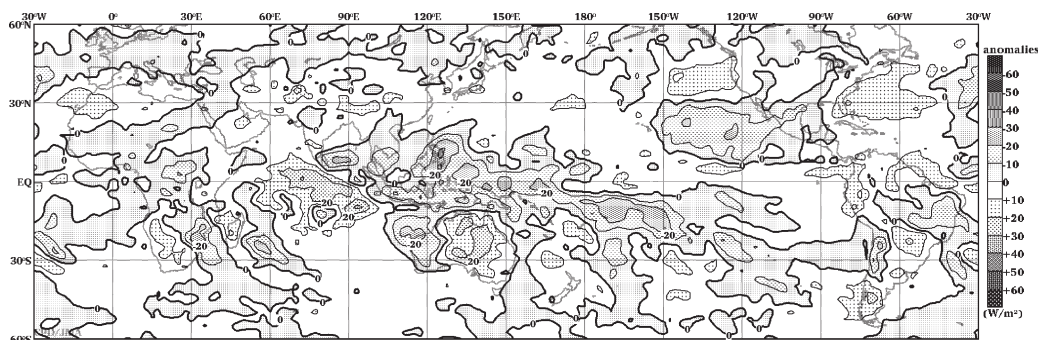
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



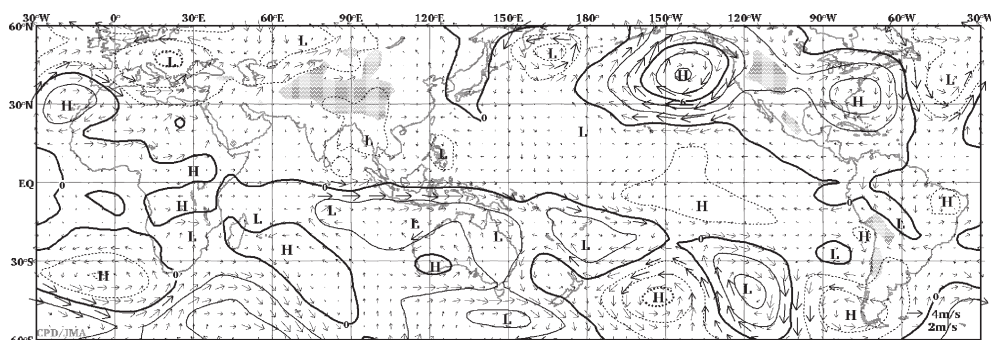
2013年1月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年のデータから作成。



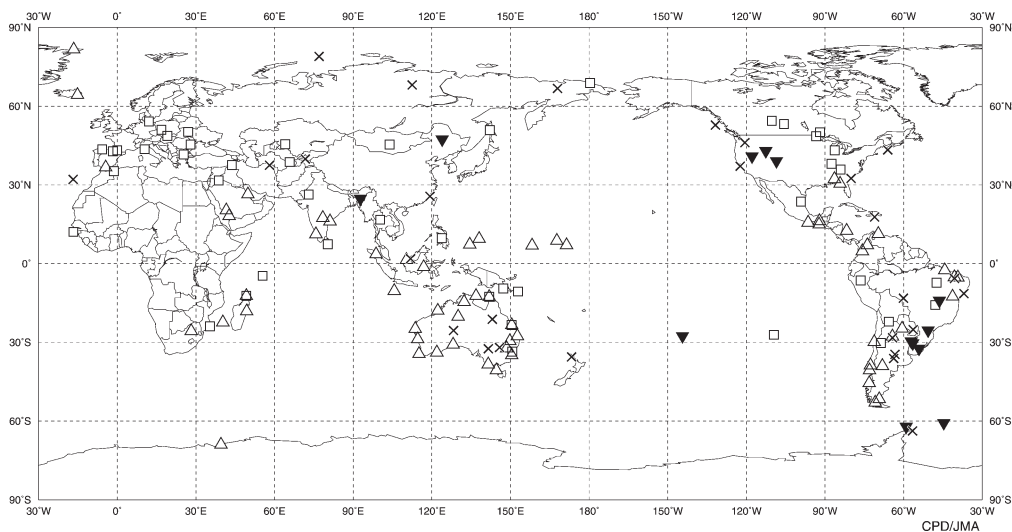
2013年1月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル
等値線間隔は20 m/s。陰影部は40 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1981～2010年のデータから作成。



2013年1月の月平均外向き長波放射量年偏差
 等値線間隔は10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データはNOAA、平年値は1981~2010年のデータから作成。



2013年1月の月平均850 hPa 流線関数年偏差および風年偏差ベクトル
 流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。平年値は1981~2010年のデータから作成。



2013年1月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。